

## ケアセンターけやき(訪問看護)

症例概要	利用者氏名	70代 男性	要介護4
	利用期間	令和7年8月～現在	
	既往歴	脳挫傷(両前頭葉・左小脳損傷) 高次脳機能障害 前立腺肥大	
	経過		

2025年2月、転倒により脳挫傷を受傷し、保存加療後に竹川病院へ転院。同年8月自宅退院後から訪問リハビリテーション開始。

高次脳機能障害による発動性の低下著明、表情変化、自発話、活動意欲が乏しく、排泄の訴えもない状態で、ご家族の多くの介助・見守りを必要としていたが、生活歴と趣味活動切り口とした介入を重ねることによって、前向きな意欲の向上と活動範囲が拡大し、生き生きとした日常生活を取り戻すことができた症例。

### 内 容

2025年2月、転倒にて脳挫傷、保存加療後に竹川病院へ転院。同年8月自宅退院後から訪問リハビリテーションを開始。高次脳機能障害による発動性低下が著明で、自発話や活動意欲乏しく、立位の保持困難、排泄の訴えもほぼ無い状態だった。そのため、日常生活全般においてご家族の介助や見守りを多く必要としており、「常に目が離せず心配」で身体的・精神的負担が大きかった。

介入初期は、覚醒レベルおよび発動性の向上を目的に、「歩くこと」に重点を置いた。

以前は山登りが趣味だったことを聞き、転倒リスク高かったが、景色や音、周囲の人の動きなど、さまざまな刺激を受けられる屋外で、重度介助下で歩行練習を実施した。屋外歩行を継続する中で徐々に周囲への反応が増え、「これ、何?」など、単語レベルの自発話が聞かれるようになった。

また、看護師がご家族へ下剤の助言を行ったことで、トイレへの訴えやトイレでの排泄回数も増加するなど、自発性と活動量の増加に伴って身体機能面にも改善が認められた。職員の訪問時には自ら玄関まで迎えに來られ、笑顔で出迎えてくださる姿もみられるようになった。

更に、趣味でプラモデルを作っていたと伺い、その話題も多く挙がるようになったことから、プラモデル作成をリハビリの一環として取り入れた。当初は作業を進めるのに声掛けを必要としていたが、徐々に自主的に取り組まれるようになり、作業中には集中した表情や笑顔など変化が多く認められた。

歩行器導入後は活動範囲が拡大し、奥さんと近所の蕎麦屋や喫茶店への外出を楽しまれるようになっていいる。「北海道旅行に行きたい」といった意欲的な発言も聞かれるようになり、その目標に向かって前向きに取り組まれている。

## 【OUR TEAM】

- 奥さん（キーパーソン）：日常生活全般の介助・見守りを実施。山登りやプラモデルなどご本人の生活歴や趣味について情報共有を行い、外出支援にも協力
- ケアマネジャー（CM）：ご本人・ご家族の希望や介護負担に配慮し、多職種連携や支援計画を調整
- 訪問診療医師：健康管理、服薬調整を行いながら、在宅生活における活動拡大を支援
- 福祉用具：ベッド貸与や屋外用歩行器の選定を行い、安全性と活動性向上を支援
- 訪問看護師：体調管理や医療的観察、排泄状況の確認や排便コントロール支援
- 訪問セラピスト：屋外歩行練習を中心に活動量向上を図り、自発話や活動性の改善につなげた。また、趣味活動を取り入れ、意欲向上を支援
- 竹川病院セラピスト：身体機能や高次脳機能障害に関する情報共有を行い、在宅生活への移行支援を実施